様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年　６月　２日現在

機関番号：３２６４１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520078
研究課題名（和文）　「慰めの手紙」における東西教父思想への古代ギリシア情念論の影響史研究
研究課題名（英文）　A Study of the Ancient Greeks' Conception of Emotions and its Impact on 'Consolatory Letters' in Eastern and Western Patristic Thoughts
研究代表者
土橋　茂樹（TSUCHIHASHI SHIGEKI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：80207399

研究成果の概要（和文）：本研究の成果としては、古代ギリシア思想、とりわけヘレニズム期のストア派及び反ストア的な新プラトン主義やペリパトス学派における情念（パトス）及びアパテイア（情念の排除）論が、初期キリスト教思想にどのような影響を与えたかを、特に東西教父における「慰めの手紙」という文学ジャンルにおいて具体的に検証・考察し得たこと、またその成果を国内外において広く公表し得たことが挙げられる。

研究成果の概要（英文）：This study clarified historically and specifically the impact of the Ancient Greeks' Conception of Emotions on 'consolatory letters' in eastern and western patristic thoughts. Some papers were already presented as a part of its results.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	700,000	210,000	910,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
2012 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：西洋思想史、教父学

１．研究開始当初の背景

本研究の学術的背景としては、(1) 古代ギリシア情念論の東西教父思想への影響に関するものと、(2)「慰めの手紙」研究の背景になるものの二種に分けられる。

(1) ヘレニズム思想のヘブライズム思想への影響史研究の中でも、情念論に関するものは、ストア派研究の急速な進展に伴い、1980年代以降、反ストア派も交えたヘレニズム期の情念論の多様な系譜研究として著しい成果を挙げ、その一方で東西教父から中世全般への影響史研究の先駆的著作も現れつつあった。

（2）初期キリスト教思想における「書簡」の位置づけは極めて重要であり、近年の教父研究の焦点の一つと言っても過言ではない。しかし、その中にあって「慰めの手紙」というジャンルの研究は、必ずしも十分な展開が為されたとは言い難い。まして、上記（1）と関連付けて（2）の論点を考察する研究は国内外において皆無であった。

２．研究の目的

本研究の目的は、活況を呈する古代情念論研究の成果を十分に活用しつつ、「慰めの手紙」研究の停滞という欠陥を補うべく、東西教父における「慰めの手紙」と呼ばれる書簡群をヘレニズム期の情念論を用いて読み解き、ギリシア哲学のキリスト教的情念論への影響を解明することにある。

具体的には、（1）ヘレニズム期の情念論及びアパテイア論の展開を体系的に纏め、次いで（2）カッパドキア教父（バシレイオス、ニュッサのグレゴリオスら）の書簡群の中から「慰めの手紙」に分類される書簡を選び出し、（3）それらを聖書からの影響と対比しつつ（1）の成果を用いて解釈し直すことがまず目指される。その上で、こうした東方教父の研究を（4）アウグスティヌスに代表される西方教父の「慰めの手紙」の場合と比較研究するところまでが本研究の目的となる。

３．研究の方法

本研究を進めるにあたっての各年度の計画・方法は以下である。

（1）初年度は、ヘレニズム期の情念論を中心的に考察する。具体的には、①予備研究としてプラトン、アリストテレスの情念論を概観し、②ストア派の情念論をガレノスらの医学的情念論や反ストア的な立場と対比しながら精査し、とりわけ教父への影響が大であったとみなされるポセイドニオスら中期ストア派に焦点を絞って断片的な知識の体系化を試みる。③以上を踏まえた上でストア派における「アパテイア」概念の解明に努める。

（2）次年度は、オリゲネスからカッパドキア教父までの東方教父が上記のような情念論からの影響を聖書的教えとどのように融合させたかを「慰めの手紙」の内に探る。具体的には、①「慰めの手紙」において、聖書的な知見から得られたものと、ギリシア哲学から得られたものとをできる限り分別し、両者を対比考察する。また、②教父たちの書簡の内で修道的なものにはアパテイア概念が必ずと言ってよいほど見出される。それらを「慰めの手紙」に現れる「情念のよき活用」いわゆるメトリオパテイアと比較することによって、カッパドキア教父におけるアパテイア概念とストア派のアパテイア概念との異同を問う。

（3）最終年度は、前年度までの研究の不十分な部分を補足した上で、研究全体を総括すべく、できる限り総合的な理解が得られるように努める。

４．研究成果

（1）本研究の初年度として以下の 4 種の研究活動を行った。

①予備的研究として、まずプラトンにおける情念の位置づけを『国家』篇を中心に考察し、その上で、アリストテレス『ニコマコス倫理学』『霊魂論』『詩学』の情念論と比較検討した。

②魂の働きを自然法則に一致する物理的なものとして一元的に理解するストア派情念論を、ガレノスらの医学的情念分析と比較しつつ、特に教父への影響が大であったポセイ

ドニオスら中期ストア派に焦点を絞って体系的に理解するよう試みた。
③新プラトン主義及びペリパトス学派の反ストア的な情念論の立場を、ストア派との対比を明確化しつつ体系的に解明した。
④以上の情念規定を踏まえた上で、ストア派の「アパテイア」を、同じくストア派由来の「エウパテイア」「プロパテイア」という概念と比較しつつ、総合的に理解するよう試みた。
以上を総括するに、断片的には従来も優れた研究が散見されたものの、本研究のように東西教父思想への影響という一貫した観点から総合的、体系的に研究されることは稀であり、まだ序論的段階とは言え、その点で大いに意義ある成果を得たものと思われる。その一部は、平成 22 年度開催の国際プラトン学会（東京）や初期キリスト教学会（メルボルン）といった国際学会にて発表され、さらに雑誌論文としても公刊され、高い評価を得た。

（2）本研究の第 2 年度として以下の 4 種の研究活動を行った。
①オリゲネスやクレメンスなどのアレキサンドリア学派、砂漠の師父としてエヴァグリオスや擬マカリオス、さらにカッパドキア教父が、「情念」をどのように解釈していたか、それぞれのテクストから探索し、どのように系統だてることができるか調査研究した。
②バシレイオスとニュッサのグレゴリオスの『書簡』を中心に、「慰めの手紙」と見なされる書簡を選び出し、それらに共通する構造を摘出した。その上で両者を対比考察した結果、それらが聖書的な知見とギリシア哲学の伝統の両面から得られたものであり、また後者に関しては、それがストア派のみならず、反ストア派、たとえばペリパトス派からの影響も受けていたことを前年度の成果を基に解明した。
③修道的な書簡に必ず見出されるアパテイア概念と、「慰めの手紙」に現れる「情念のよき活用」いわゆるメトリオパテイアとの比較、およびカッパドキア教父におけるアパテイア概念とストア派のアパテイア概念との異同を、前年度の成果を基にさらに追究した。
④以上の成果の内、①に関連しては平成 23 年 8 月開催の東方キリスト教学会において、また②と③に関しては、平成 23 年 8 月にオクスフォードで開催された国際教父学会において研究発表され高い評価を得た。前者は平成 24 年 3 月発行の『エイコーン』誌(査読有)に、後者は平成 23 年 12 月発行の欧文誌 *Patristica*（査読有）にそれぞれ発表され、大いに意義ある成果を得たものと思われる。

（3）本研究の最終年度である平成 24 年度には、以下の 3 種の研究活動を行った。
①前年度までの研究成果を統合したものから得られるギリシア教父における「慰めの手紙」の構造や性格と、アウグスティヌスの書簡や説教から見出される「慰めの手紙」の構造や性格を比較考察し、両者の異同を問い、それぞれの固有性をできる限り明確に提示することを試みた。こうした研究の過程で、キリスト教における救済論的思想とギリシア哲学がきわめて大きな影響史的関係にあること（たとえば両思想圏でのオイコノミア概念の相関変遷史）が見出され、今後の大きな研究指針を得ることができた。国内での先行研究がほとんどない状況での個人研究は困難をきわめたが、今後の研究進展のための礎石を築くことができた点で大きな意義があったものと思われる。
②東方と西方、つまりギリシア語圏とラテン語圏で「情念」（パトス）に対する身の処し方、対峙の仕方は異なるのか、近似している

のか、パトスやアパテイアに対する理解ではどうなのか、以上の問題をギリシア的思想伝統からの影響関係と相関的に、可能な限りの総合的な理解を得られるよう試みた。感情論の見直しが国内外で進みつつあるが、教父学という独自の視点からこの研究領域に少なからぬ貢献ができたものと思われる。

③以上の研究に基づき、平成 24 年に開催されたアジア・太平洋初期キリスト教学会（韓国ソウル）および日英古典学シンポジウム（英国オクスフォード）において、本研究に関連する研究発表を行い、その成果を広く各国の研究者に提供することができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計８件）

①土橋茂樹
抄録者シメオンはマカリオス文書の何を切り捨て、何を残したのか―『フィロカリア』所収の抄録版『五〇の講話』をめぐって―、エイコーン、査読有、42、2012、5-20

②土橋茂樹
Apatheia and Metriopatheia in Basil of Caesarea's Consolatory Letters 、*Patristica*、査読有、3、2011、17-23

③土橋茂樹
洞窟に降り来った太陽－教父思想への「洞窟の比喩」の影響史－、理想、査読無、686、2011、100-111

④土橋茂樹
アパテイアの多義性と「慰めの手紙」―東方教父におけるストア派の両義的影響―、中世思想研究、査読有、52、2010、116-125

⑤土橋茂樹
Homotimia and *synarithmesis* in Basil of Caesarea's *De Spiritu Sancto* 、*Studia Patristica* 、査読有、47、2010、105-110

〔学会発表〕（計６件）

①土橋茂樹
"Descent of the Sun into the Cave: the historical influence of the 'cave silile' on patristic thought", Symposium: Freedom and the State: Plato and the Classical Tradition, 2012 年 8 月 6 日, Oxford、英国

②土橋茂樹
"Psudo-Macarius' Homilies in the Philokalia", 7th Asia-Pacific Early Christian Studies Society, 2012 年 7 月 6 日, Presbyterian College, 韓国

③土橋茂樹
"Apatheia and Metriopatheia in Basil of Caesarea", 16th International Conference on Patristic Studies/University of Oxford, 2011 年 8 月 10 日, Oxford, 英国

④土橋茂樹
"Construction of a City in Speech and Purification of the City", International Plato Society IX Symposium Platonicum: Plato's *Politeia* , 2010 年 8 月 3 日, 慶應義塾大学

⑤土橋茂樹
"The Trinity and Political Metaphor in Gregory Nazianzen's Theological Oration 29.2", 6th Prayer and Spirituality in the Early Church, Centre for Early Christian Studies, 2010 年 7 月 9 日, Melbourne, Australia

〔図書〕（計２件）

①土橋茂樹、他
知泉書館、『中世における信仰と知』(「カッパドキア教父における信仰と知の問題」)、2013 年、31-50

②土橋茂樹、他
講談社、『西洋哲学史Ⅱ』(「教父哲学」)、2011 年、97-149

〔その他〕
ホームページ等
http://c-faculty.chuo-u.ac.jp/~tsuchi/

６．研究組織
(1)研究代表者
土橋　茂樹（TSUCHIHASHI SHIGEKI）
中央大学・文学部・教授
研究者番号：80207399